奇兵隊蔵書と北九州市立図書館

――小笠原文書の継承をめぐる近世と近代の接続――

伊東達也

問題の所在

本研究は、近世から近代への転換期に日本各地に設けられた図書館の実例に基づいて近代図書館の概念が受容される過程を確認し、図書館観をめぐる合意がいかにして民意の中に醸成されたかを解明することを目的としている。そして、これにより近代図書館の制度と思想が日本社会に位置づけられていく過程を構造的に示すことをめざす。

従来議論が重ねられてきた近世教育と近代教育との連続・不連続の問題を図書館制度について見てみると、近代図書館のコンセプトを受け入れることのできた近世の読書施設を図書館の日本的底流としてとらえ返すという視点を得ることができる。前近代の読書施設と近代公共図書館との接続については、これまで「木に竹を接いだ」ようだと評されてきた。小川徹は、従前の日本の図書館史では、近代の図書館は近世の文庫とは断絶したところから発生したものとして描かれており、そこにこそ日本の図書館の特異性が存在するように語られてきたことを指摘しているが、[1]このことは、教育史研究における近代研究者の側の「近世」への軽視[2]のような状況が、図書館史研究においても生じていたことのあらわれであろう。

新谷恭明は、近世の学校から近代の学校への接続について「制度としては断絶させられたとしても、意識的には繋がっているということはできる。教育というのはそういう精神的な部分を含んでいるからである」[3]と論じているが、学校だけでなく読書施設についても、近世と近代は「意識的には繋がっている」といえるのではないだろうか。とするならば、文庫や貸本屋などの近世の読書施設と近代の図書館とは全く断絶した存在ではなく、それらの概念や機能は明治期以降にも底流として受け継がれ、そうした近世的心性が近代を受入れるという葛藤のなかで、図書館観をめぐる合意が民意のなかに醸成されていったと考えられる。

近世の読書施設との接続がうかがわれる事例には、明治末期から大正期にかけて各地に設立された公立図書館やその前身となった図書館がある。県や市の事業として図書館の設立が企図される際に、その地域の旧藩主家からの寄贈図書が蔵書の中核となった事例は多

いが、それ以前の、明治十年代に設立された公立書籍館や地方教育会による図書館が、新知識の摂取や直接的に教育活動に資することを意図して旧時代の文化との断絶を生じる傾向があったのに対し、旧藩領域をサービス対象に設定して設立された図書館においては、藩校蔵書など旧藩の文化遺産が継承されることが多く、そこに新旧文化の融合が生じていた[4]。

近世の文化遺産を継承するという機能が近代図書館に求められるとするならば、その遺産を持ち伝えてきたのは前代の行政組織である旧藩にほかならない。近代図書館を受け入れる底流としては、旧藩蔵書の継承だけでなく、それらを含んだ旧藩の教育政策やその延長上にある明治期以降の旧藩主家による旧藩領に対する支援事業を想定すべきであり、そのような教育政策の継続と進展の背景には、幕末から明治への時代の転換に適応した旧藩士民の「時務」の意識が作用していると考えられる[5]。

近代図書館の成立と旧藩の時務意識

「時務」とは儒学用語で、島津斉彬によれば「時勢を考」え「時勢相応ノ政務ヲ執行[6]」することをいう。尊王攘夷イデオロギーを形成した水戸学の大成者、会沢正志斎の晩年の著作に『時務策』があり、横井小南にも「時務策」と題された藩政改革論がある。「時務策」とは律令制において政治の要務に関する方策のことをさすが、「時務を知るは俊傑に在り」といわれるように、幕末・維新の変革期においては、志士とよばれる個人だけでなく旧藩組織自体も、この時務意識の高さによって激動の時代を生き延びることができた。

そうしたなかで、豊前六郡（企救、田川、京都、仲津、築城、上毛）を領した小笠原藩は、幕末維新の歴史の荒波のなかにあって、敗戦のうえ藩都を占領されるという不運に見舞われつつも存続し、藩の存在だけでなく、藩校教育の近代教育への移行・再編をも果たした稀有な例となった。

藩校蔵書など小笠原家の文書は、その多くが焼失したものの、一部が文化財として現代に継承されている。そこで本稿では、旧小倉藩主小笠原家の藩政資料である小笠原文書の保存と継承の顛末をあらためて辿ることにより、小笠原藩の事例について、読書施設における近世と近代の接続の側面を明らかにする。

第二次長州戦争による文書の分散と散逸

周知のように、第二次長州戦争において敗色の濃くなった小笠原藩（小倉藩）は、一八六六（慶応二）年八月一日自ら小倉城と城下町に火を放って後方陣地に撤退し、藩庁も田川郡香春に退いた[7]。その際、藩士やその家族だけでなく城下町の住民も「わずかな貴重品を身に着け、事態の推移もわからないまま、長崎街道・中津街道・香春街道を通り、確たる当てもなく、わずかに知己を頼って城下から落ちていった」ので、周囲の街道は大混雑であったといわれている[8]。

翌八月二日には長州軍の先鋒部隊が小倉城下に入り、城下の東の長浜に駐屯した。当時の小倉の状況について、長州軍奇兵隊の軍監であった山縣狂介（有朋）は「城下の景況を見るに急遽に軍議を決し狼狽して兵を引揚げたりと見へて城中の糧米銀札及び書庫等の如きも皆其儘に放棄して遁去り藩士の邸宅の如きは盡く家財器具を残留したり…城下の市街には一も市民の影を見ず民家は悉く開放して他人の濫入に任せたり」と回顧録に記しているが[9]、このとき奇兵隊が、小倉城三の丸にあった小笠原藩の藩校思永館の書籍の一部を長州に持ち帰っていたことが知られている。

下関の豪商・白石正一郎の日記には、慶応二年八月八日付で「過二日小倉渡海の節書物二十箱程軸もの五ふく分捕致候由に付[10]」とあるが、奇兵隊が持ち帰った書籍は『和漢三才図會』、『国史餘論』、『五代史』、『唐史』、『伝家法』、『経典釈文』など貴重なものが多く[11]、このうち後に散逸しなかったものが、現在、山口県立山口図書館（三一四冊）、山口大学図書館（一五五冊）、下関市立東行記念館（七冊）ほかに所蔵・保管されている。「思永館」という円形の所蔵印と並んで「奇兵隊印」という四角形の所蔵印が押印されている点が特徴である。

一方、落城の際に小倉城内に残っていた古文書や書籍はその大部分が焼失したと思われるが、一部は小笠原藩士らによって持ち出されており、小倉から藩庁を移転した田川郡香春に退避、その後、明治三年の仲津郡豊津への藩庁再移転と豊津藩の成立に伴って豊津藩庁に移管され、豊津県が小倉県に統合された後も、豊津県民政局の施設であった小笠原家豊津別邸内で保管され続けた[12]。

このとき小笠原家（豊津藩）に残った文書や書籍の一部が、昭和二四年の小笠原家豊津別邸引払いの際に小笠原家から福岡県立豊津高等学校同窓会に寄贈され、平成一七年以降は福岡県指定文化財の「小笠原文庫」として現存している。藩政資料全般を含む「小笠原文庫」の総数は七千点以上に及ぶ[13]。

奇兵隊の時務意識と読書

一八六六（慶応二）年八月当時、奇兵隊の本陣は吉田（現在の下関市吉田）にあり、そこに隊員共有の書物を置く図書室も設けられていたといわれている。青木正児はこの奇兵隊の図書室について、「奇兵隊の隊長高杉晋作は下関に居て采配を振ったのであるから、この時奇兵隊の図書室は下関の伊崎の藩舎に置かれていたのではあるまいか…隊長高杉は嘗て江戸の大学昌平黌に学んで詩文を善くした文武兼備の士であるから、図書室の設置は恐らく彼の指図であろう[14]」と推察しているが、「奇兵隊日記」をみると、「夜、読書休止之事」（元治元年四月十五日）、「於壇之浦二七之日、新論講釈相始候事」（四月十七日）、「読書掛り相定候間、御承知可被成候」（四月十九日）、「隔夜ニシテ文章規範講会相始候事」（四月廿日）、「文学会の稽古日」（六月十三日）、「諸稽古規則　朝六ツより五時迄、読書、夕七ツ時より六時迄、右読書」（慶応元年四月二十五日）などとい

う記述がある。[15]

奇兵隊を指導した高杉晋作が学んだ松下村塾には「自非読萬巻書寧得為千秋人」、「自非軽一己労　寧得致兆民安」という聯が掲げられており、また高杉は吉田松陰の留魂録のなかの「天下ノ事ヲ成スハ天下有志ノ士ト志ヲ通スルニ非レバ得ス」という言葉から「陪臣軽卒藩士を不撰同様に相交[16]」る奇兵隊を発案したといわれているところからすれば、奇兵隊士が「天下有志ノ士」として、共有の蔵書によって日々学んでいたことは疑いのないところである。

この奇兵隊の読書について小川五郎は、諸隊独自の活動というより当時の長州藩政府の方針であり政策の一環であったことを指摘し、その根拠として一八六七（慶応三）年二月に「明倫館諸芸幷諸隊其外」あてに出された御直書附の中の「文武の修業ハ奉公之根所といへども修業方方向不定し而ハ其才識適当之用を成かたく依之此度諸芸仕法改正申付候間孰れも時勢を弁へ勉励肝要之事ニ候…兵学文学を以諸士之本職と可相心得就而は文学兵学両輪にして不可偏廃」という藩主の言葉をあげている。[17]戦争のさ中の国事多難な状況であればこそ「時勢を弁えた勉励が肝要」であり、「兵学文学を諸士の本職と心得」て日々励むようにという長州藩全体の時務意識の高さが、小倉城からの思永館本の「分捕」につながったといえるが、安冨静夫は、奇兵隊士がこの思永館本も使って「朝・夕二時間、学習をしていた」ことを明らかにしている。[18]「奇兵隊印」という蔵書印が押されているところからすれば、小倉から持ち帰った書籍もこの図書室の蔵書として学習に利用されていたと考えられる。

小笠原藩の時務意識と読書

一方小笠原藩にとっては、対長州戦争の敗北と小倉城の落城、香春での暫定政府のもとでの藩校の再開、そして豊津での新たな藩庁・藩校の建設と豊津藩の成立という激動の幕末維新期の数年間は、藩政だけでなく教育においても自己変革を遂げざるを得なかった数年間であったといえる。

小笠原藩は、一六三二（寛永九）年に小倉藩主細川氏が熊本へ移封になったあと、播磨国明石から小笠原忠真が豊前六郡に入って成立した藩である。細川氏の転封後には、他に播磨国竜野から小笠原長次が豊前二郡（下毛、仲津）に、忠真の弟忠知が豊後杵築に、摂津国三田より松平重直の四譜代大名がそれぞれ入っている。豊前は地理的に交通の要所であり、幕府の九州統治の最前線ということで、譜代四大名の筆頭である小倉小笠原藩は江戸幕府の「九州探題」と称されたという。[19]

このような幕府の期待を背負った小倉小笠原藩であったからこそ、幕末維新期に不運な末路をたどることになったのであるが、一八六六（慶応二）年八月の小倉落城後十月に香春に藩庁を移し、その後明治になってから豊津に安住の地を求めて移転し、ここで近代への新しい道を歩み始めることになる。教育制度についても小倉時代から藩校の思永館を維持してきたが、豊津移転後は育徳館と名称

を変え、近代を意識した再組織化をはかっていた[20]。

小倉から香春への藩庁移転後、長州藩との和平交渉の目途がついた一八六七（慶応三）年五月一日、小笠原藩は、早くも藩校思永館再興の触書を出している。香春の光願寺を本館とし、同時に散在している藩士のために藩内各地の寺に支館を設けた[21]。寺院を借り受けての開校であり暫定的なものであることは明らかであるが、世情が落ち着きをみせるとすぐに藩校を再開した理由には、非常時における藩校教育への期待が大きかったことがうかがえる[22]。

思永館は、第四代藩主忠総治世時の一七五八（宝暦八）年に小倉城西三ノ丸内の藩儒石川正恒（麟州）宅に書斎を設け、思永斎と名付けたことをその淵源としている。一七八八（天明八）年に文武を統一して思永館と改称し、以来約八〇年間（思永斎から数えれば一一〇年間）、小笠原藩の藩校として存続してきた。一貫して京学系朱子学の学統を守り、石川正恒（麟州）―石川彦岳―矢島伊浜という学問的な継承がなされている。

講習内容（習読書目）については、一八四三（天保一四）年に当時の頭取矢島伊浜によって大幅な改正が行われているが、この改正について新谷恭明は、矢島伊浜の「此の時藩学漸く萎靡の兆あり[23]」という言葉にあらわれているように、幕府や諸藩による天保の改革の一環として綱紀粛正や財政立直しを図る「時務」に応ずるという危機感からなされたものであり、習読書目を朱子学の原点である孝経、四書、五経の基本から始めることに改めることで、当時の藩士の「時代に押されて浮ついた風潮を引き締めることによって変動しつつある時代に対応していく」ための改正であったことを明らかにしている[24]。この天保の改革の際に確認された小笠原藩の学校観・教育観が香春へ撤退した時期においても定着していたとすれば、一八六七（慶応三）年の香春での思永館再興は、まさに敗戦からの藩政の立て直しという非常時に応ずるための時務としてなされた政策であったといえる[25]。

翌年の一八六八（明治元）年十一月に藩庁の豊津への再移転が決定すると、それと同時に思永館も豊津に移ることが決まり、一八六九（明治二）年一月には名称が思永館から育徳館に改められる。そして三月には校舎の建築工事が始まっている。

新藩校育徳館は一八七〇（明治三）年一月に開校した。開校当初こそ講習内容も従前と変わらなかったが、その年の秋に育徳館は、講習科目に洋学を取り入れている。即ち、一八七〇（明治三）年十月に大橋（現在の行橋市）に洋学校を開いた。

豊津は最初、難行原とよばれていた原野であったが、天保年間には錦原と称されるまでに開墾された新開地で、明治元年にここへの藩庁移転が藩士の投票によって決定した際に豊津と改称されている[26]。豊津に移転した小笠原藩は人心一新して対長州戦以来の疲弊から立て直しを図る決意にあふれており、アメリカ人を雇って蒸気船の操縦と機関についての技術講習を始めたり、藩士をイギリスへ留学させたりしている。一八七〇（明治三）年に政府に届け出た所有

兵器のなかにアームストロング砲三門、大砲六四門、外国製小銃三九〇〇挺余が含まれているところからみれば[27]、軍事面での整備も急速に進んだと思われ、藩校への洋学の導入もこの人心一新、藩政立て直し政策の一環であったと考えられる。

元来小笠原藩は洋学への関心が薄く、医学の領域ですらほとんど洋学は行われていなかったので、近隣諸藩に比べて洋学研究は立ち遅れていた[28]。最初の洋学校が豊津ではなく大橋に設けられたことについて古賀武夫は、「洋学を拒否する勢力が豊津に居たこと、洋学を学ぶことを希望する徳人層が大橋・行事両村に住んでいたことの二つの事情が重なり合って実現したと云ってよかろう[29]」としているが、豊津は藩庁などの行政機関が集中した町であるのに対し、大橋、行事は海に面した商業地域として幕末以来、経済的に急成長してきた場所である。洋学校の入学者の中に行事村の百姓身分の者がいることからも[30]、洋学を受入れる基盤のあった大橋において、まず洋学教育を確立し、その後時機をみて豊津の育徳館に移す計画であったと思われる。

小笠原藩は一八七一（明治四）年にオランダ人フハン・カステールを教師として採用し、洋学教育をさらに進展させた[31]。カステールが小笠原藩の東京藩邸を経て大橋の洋学校に着任したのは九月十四日であり、これを機に大橋洋学校で教鞭を執っていた日本人教師と一部の生徒を豊津の育徳館に移して、以後洋学は豊津と大橋の両方で行うことになった[32]。そして一八七三（明治六）年四月、ようやくカステールを豊津の育徳館に迎えることができた。

新谷恭明は、カステールが豊津に着任して以後、育徳館は洋学を主とする中学校へと転換し、「言わば藩校から近代の学校へと脱皮した」としているが[33]、洋学に関心の薄かった小笠原藩が短期間のうちに藩校を洋学化・近代化するほどの変革を遂げた原因には、対長州戦争の敗北が動機付けとなった強い時務意識がはたらいていたと考えられる。

また注目すべきは、この時期の小笠原藩ただ一人の洋学者であった吉雄正安が、一八六九（明治二）年七月十九日に育徳館の蔵書買付のために大阪に赴いたという記録が残っていることである[34]。

小笠原藩の藩校蔵書は、その一部が小倉城から救出された後にも補充され、香春、豊津で活用されていたことがわかるが、この明治二年の補充は大橋洋学校の設立に備えたもので、急いで洋学教育を進めなければならないという藩の時務意識が表れたものであろう。周知のように対長州戦においては長州軍が洋風の軍隊を駆使していたのに対し、小笠原軍は「悠々山家流ノ軍鼓ヲ鳴ラシ、螺ヲ吹ク。兵士之ト和シテ緩歩、其状吐綬鶏ノ歩スルガ如ク、意気揚々本丸ヲ出テ室町、京町ヲ経テ門司口ヨリ進軍ス。其行装或ハ甲冑ヲ著シ、或ハ烏帽子直衣ノ者アリ。黄又ハ緋羅紗ノ陣羽ヲ服シ。陣笠ヲ被フルアリ。手ニ弓槍ヲ持アリ。又僕ヲシテ槍ヲ捧ケシムルアリ。鉄棒ヲ提クルアリ、銃ヲ荷フアリ、総テ頭額ニ白鉢巻ヲナシ、概ネ切鞋ヲ穿ツ[35]」という状態であったので、敗戦の原因の一端がこの軍事面

での不備にあったと理解していたとすれば、それが洋学推進の要因の一つになったとも考えられる。

幻の藩都小倉

以上のように、小笠原藩における時務意識は長州戦争の敗戦を機に高まり、その顕われとしての藩校教育の再編と拡充のなかで、洋学などの新たな読書も進められてきたといえる。それに対して長州藩では、いわば新しい時代を切り開くという幕末以来の積年の「時務」を行うために、思永館本までも活用して読書が続けられていた。

小笠原藩にとって、長州藩の影響がなければ香春・豊津での藩校の再興や大橋洋学校の設立はなく、その結果としての藩校育徳館の近代学校への転換はあり得なかったであろう。そこで、あらためて注目したいのは、この時期に高まった小笠原藩の時務意識の発露としての教育政策や、その発展形としての明治期以降の旧藩領への支援・育英事業の対象が、まさに長州戦争の影響によるものだけに、藩都小倉ではなく新天地の豊津において、藩校教育とその後継としての中学校の設立[36]、士族授産会社や銀行の設立などに集中せざるを得なかったということである。

小倉城の落城後も小倉を含む企救郡での戦闘は続いたが、一八六七（慶応三）年一月に両藩の講和が成立し、講和条約に基づいて企救郡は長州藩の管轄するところとなった。小倉城下の弱体化について、北九州市史は次のように描写している。

> 小倉城自焼で城下町商人の多くは避難し、避難先から帰って来ず、特に西曲輪の焼け跡は容易に復興の兆しを見せず荒廃のまに放置された。藩庁の置かれた田川郡香春は中原屋（中原嘉左右）をはじめ大商人が藩の用を達し、行事・大橋（現在の行橋市）だけでも30件の小倉城下町商人が避難で滞在し、そこで商業活動を営んでいた。…いずれにせよ長州藩占領下という制限で自由な商売はできず、多くの商人たちは帰ってこず、小倉の商業界は大きく弱体化した。諸商品は、どんどん安値で他領から入ってきた。[37]

長州藩による企救郡の占領支配は、この後一八七〇（明治三）年二月の日田県出張所の設置まで続くことになる。一八六九（明治二）年六月から実施された版籍奉還の際、小笠原藩は企救郡を旧藩主小笠原知藩事の管轄下に移すよう政府と交渉を重ねていたが実現せず、結局日田県の管轄下となったもので、日田県の管轄といっても実際は長州藩による占領が続いていたといわれている。[38]

この占領期に続いて一八七一（明治四）年七月、廃藩置県により豊津藩は豊津県となり、企救郡は政府直轄地としての日田県の管轄下におかれた。しかしその四か月後の十一月には、全国的な県の統廃合により豊津県、千束県、企救郡、それに中津県を加えて豊前一

国での小倉県が誕生した。この時点で小倉は再び小笠原藩の藩都として蘇生したといえるが、それも束の間、四年後の一八七六（明治九）年に小倉県は福岡県と合併（中津県は大分県と合併）してしまうのである。

小倉は関門海峡に面しているだけでなく筑前・豊後・田川にいたる分岐点にあたり、九州統治の要所であることは幕政時代から変わらない。新政府は一八七一（明治四）年四月に太政官布告によって軍制を確立し、東京に薩摩藩、長州藩、土佐藩を中心とする軍団を設置して東北の石巻に東山道鎮台、九州の小倉に西海道鎮台を置いた。政府はこの武力を背景に廃藩置県を断行したのであり、廃藩置県を実現するために小倉の西海道鎮台が果たした役割は大きかったものと思われる。それだけに、以後小倉は旧城下町としてではなく、政府（軍）の直轄地として性格づけられることになる。

一八九四（明治二七）年の日清戦争の際には、小倉は「旅団の出兵や召集兵や物資調達の商人の出入りなどで騒々しく」[39]なったが、その後の軍備拡張政策において、さらに新設の第十二師団が小倉に設置されることとなり、広島以西の四個師団を管轄する西部都督府が一八九六（明治二九）年に小倉に開庁した。一八九八（明治三一）年には小倉城内に師団司令部が開庁するのに伴って憲兵隊・衛戍監獄・兵器支廠が設けられ、あわせて新設の歩兵や騎兵、野砲、工兵ほかの連隊が小倉郊外の北方に駐屯した。「将校たちの多くは小倉の町に住み、休日には北方の兵営から外出してくる兵士たちで、小倉の町には軍服姿がはんらん」[40]し、新聞でも「数年前までは商業沈静し市家寂寞の観ありし小倉の地は昨年来俄かに活気を帯来たり此の進運に伴ふて著しき現象を見るものは自今市中に一家の空家を見さること、地価の騰貴せし事等の一端を窺知するに足る」[41]と報じられるほどになる。そしてついに人口が三万人を超え、一九〇〇（明治三三）年四月の市制施行に至った。

市制施行に伴って学校などの都市施設の整備も進められたが、中学校については、豊津とは異なり設置が遅れることとなる。一八七九（明治一二）年九月、福岡県は学制に基づいて久留米、柳河、豊津に中学校を設置した。既設の福岡中学校を加えてこの時点で県下に四中学校が存在したことになるが、小倉には豊津中学小倉分校として一八八〇（明治一三）年十一月に小倉鳥町の西蓮寺を仮校舎として開校している。設立資金として企救郡教育会が二百円を提供し、不足分は有志の寄付によったという。ところが県費からの補助金が明治十七年度限りで廃止になり、職員を減給して存続したが、一八八六（明治一九）年には、小学校令による高等小学校への転換を余儀なくされてしまう[42]。

その後、県立の中学校として小倉中学校（現在の県立小倉高等学校）が設立されるのは二十年後の一九〇八（明治四一）年であり、小倉市及び附近各郡各市町が共同で中学校敷地一万坪と設備費一万円を寄付することで設立されている[43]。

一方、豊津中学（前県立豊津高等学校、現在の県立育徳館高等学

校）の場合、一八七三（明治六）年の藩校育徳館と大橋洋学校を合併した私立育徳学校の学制下の中学校としての存続危機に続き、一八八六（明治一九）年の中学校令改正による県立中学校としての存続危機の際にも、小笠原家（当主小笠原忠忱）からの支援によって乗り切っている。[44]

小倉市立図書館と小笠原藩

一九〇〇（明治三三）年一月に小倉町議会が福岡県知事に提出した市制施行の具申書の中で、当時の小倉町長大神輔義は次のように述べている。

> 我小倉町ハ元ト小笠原家ノ城下ニシテ全国中著名都市ノ一ナリキ。然ルニ慶応二年国難ニ際シ小笠原家居城ヲ豊前国豊津村ニ移転セラルヽヤ、三千八百有余ノ士族ハ勿論其他商家ニ至ル迄国内各地ニ散住シ為ニ一朝過半ノ戸口ヲ失ヒ土地ノ荒廃、商業ノ衰頽亦名状スベカラザルノ悲境ニ至レリ。然リ而シテ元ト小倉ノ地勢タル、九州ノ咽喉ニ当リ、四通八達最モ商業工業ノ要地タルヲ以テ廃藩置県ノ当時小倉県ヲ置カレシ際ヨリ漸ヲ追フテ復旧ノ趨勢ニ赴キツツアリ[45]

小笠原藩の藩都として発展するはずであった小倉が「一朝過半ノ戸口ヲ失」い「土地ノ荒廃」にみまわれた後、地勢上の要所であるところから「軍都」として復興するのだが、この小倉に近代図書館（読書施設）が設立されたのは、一八八八（明治二一）年十一月の私立企救郡教育会による「企救郡書籍縦覧所」が最初である。教育会の会員や教育関係の有志に図書や器械・標本などの教材の寄贈・寄託を求めた上で醵金により運営したが、運営資金の不足のために一八九七（明治三〇）年に解散している。[46]その後、一八九九（明治三二）年の図書館令の公布と同三三年の市制施行をうけて小倉市が図書館設立を計画したが、これも資金不足のために実現せず、一九一一（明治四四）年に至って、小倉市教育支会により市内の小学校教員研究会の活動の一環として「読書趣味を養成し、自己の修養に資し、兼て教育上の理論及び実際を研究」する目的で、教育会によって「小倉市小学校教員修養会図書館」が設立されることになる。[47]

この「修養会図書館」が、一九二二（大正一一）年四月に、東宮の欧州外遊帰朝を記念した「小倉市立記念図書館」として市に移管され、現在の北九州市立中央図書館へとつながることになるのだが、小倉においては、前身となったのが教育会による読書施設であるだけに、図書館に旧藩蔵書が継承されず、旧藩の教育政策の延長としての支援も受けることができずに、旧時代の文化との断絶を生じてしまっているといえる。そしてこの傾向は、小倉だけでなく現在の北九州市立図書館を構成している旧門司、戸畑、八幡、若松の各市の図書館についても同様である。

その大部分が小笠原家豊津別邸から県立豊津高等学校に引き継がれた小笠原文書の一部（一六五点）が、小笠原家から北九州市立小倉図書館に移譲されたのは一九七一（昭和四六）年のことである。

おわりに

近代図書館の成立過程における旧藩の時務意識の影響を、北九州市立図書館（小倉市立図書館）についてみてみると、そこには第二次長州戦争による長州藩の影響を大きくみることができる。

時務意識において先進の長州軍に敗れたことにより小笠原藩の時務意識が高まり、藩校教育の再興や洋学の導入に伴って小笠原文書の補充と継承も進められたのであり、本来ならば、それがそのまま藩都小倉での近代図書館の成立につながるところであった。しかしそれは、小笠原藩が小倉を撤退し長州藩に明け渡すという、まさに敗戦の結果であっただけに、小倉の図書館が小笠原藩の文化遺産を継承するという近世と近代の接続は、この段階では成立し得なかったものと考えられる。

そのような意味では、現在の北九州市立図書館も、小笠原藩と長州藩という旧藩の影響のもとに存在しているといえるかもしれない。

注

(1) 小川徹「前近代における図書館史はどう描けるのか」『図書館文化史研究』一三号、一九九六年：一頁。

(2) 『講座日本教育史 5 研究動向と問題点』第一法規出版、一九八四年：一一〇頁。

(3) 新谷恭明「明治期の中等教育に於ける二つの接続」『近代日本研究』三一号、慶應義塾福沢研究センター、二〇一四年：五一頁。

(4) 永末十四雄『日本公共図書館の形成』一九八四年：七四－七五頁。

(5) 伊東達也「県立図書館の成立過程における近世と近代の接続について：鍋島家による佐賀図書館の設立をめぐって」『教育基礎学研究』一七号、二〇二〇年。

(6) 島津斉彬「十ヶ条訓論」『日本教育史資料』三：二八二－二八六頁。

(7) 当時の小倉藩の記録に「採銅所町仮政府ヲ香春町ニ移シ御茶屋ヲ以テ仮政府トナシ」とある（毛利家文庫66-43-10-7「慶応二年十月小倉藩記長州戦争始末 七」山口県立文書館所蔵）。

(8) 北九州市史編さん委員会編『北九州市史 近世』北九州市、一九九〇年：九〇二頁。

(9) 山縣有朋「懐舊記事巻之四」『山縣公遺稿・こしのやまかぜ』

マツノ書店、二〇一二年：一六八頁。

⑩ 下関市市史編集委員会校訂『白石正一郎日記』下関市、一九五九年：七〇頁。

⑪ 維新回廊構想推進協議会『維新史回廊だより』二七号、山口県観光スポーツ文化部文化振興課、二〇一七年：三頁。

⑫ 「福岡県指定文化財小笠原文庫」『みやこ町歴史民俗博物館だより』四号、みやこ町歴史民俗博物館、二〇〇六年。

⑬ 『福岡県指定文化財小笠原文庫目録』福岡県立豊津高等学校錦陵同窓会、二〇〇六年。

⑭ 青木正児「奇兵隊の戦利品」「奇兵隊の読書欲」『青木正児全集』七巻、春秋社、一九七〇年：三五七－三六〇頁。

⑮ 田中彰監修『定本奇兵隊日記 上』マツノ書店、一九九八年。

⑯ 「奇兵隊隊法上申書」（田中彰『高杉晋作と奇兵隊』岩波書店、一九八五：一八頁より引用）

⑰ 小川五郎「奇兵隊と思永館本」『防長文化史雑考』マツノ書店、一九九三年：一六五頁。

⑱ 前掲11：四頁。

⑲ 平野邦雄・飯田久雄『福岡県の歴史』山川出版社、一九七九年。

⑳ 新谷恭明『尋常中学校の成立』九州大学出版会、一九九七年：一一四頁。

㉑ 『福岡県立豊津高等学校七十年史』一九五八年、二二頁。

㉒ 前掲20：一二〇頁。

㉓ 「思永館御条目義解」和田清編『藩校思永館』小倉図書館、一九五四年：九－二〇頁。

㉔ 前掲20：一一七－一一九頁。

㉕ 前掲20：一二〇頁。

㉖ 友石孝之「今の豊津昔の豊津」『合本美夜古文化』美夜古文化懇話会、一九七一年。

㉗ 豊津町史編纂委員会編『豊津町史下巻』豊津町、一九九八年：八二頁。

㉘ 前掲20：一二三頁。

㉙ 古賀武夫「藩校育徳館の近代化（五）」『西日本文化』一八六号。

㉚ 前掲29。

㉛ 「豊津藩庁ノ命ヲ奉シタル渋田見大属ト、和蘭人フハンカステールトノ約定書」「豊前の洋学校」『福岡県史資料』第三輯、一九三四年。

㉜ 「豊前の藩校及び洋学校」『福岡県史料叢書』第四輯、一九四八年。

㉝ 前掲20：一二八頁。

㉞ 『中原嘉左右日記』（西日本文化協会、一九七〇年）「七月十九日朝より雨終日終夜強雨大冷気　一　吉雄正安先生今日御用、育徳館書籍買入方、登坂被仰付候事」

㉟ 「小倉藤田弘策日記」『福岡県史資料』第八輯。

㊱ 明治六年四月に藩校育徳館が廃校になり、大橋洋学校と合併し

て私立育徳学校となった際、その財政危機を救うために当時の小笠原家当主小笠原忠忱が五千円を寄付して学校の存続に全面的に協力している（庄山奎典『錦陵百年』西日本新聞社、一九七二年：二三頁）。

㊲ 前掲8：九一四－九一五頁。

㊳ 米津三郎編著『わが町の歴史小倉』文一総合出版、一九八一年：一八四－一八五頁。

㊴ 前掲38：二〇八頁。

㊵ 前掲38：二〇九頁。

㊶ 『門司新報』一八九六（明治二九）年四月二一日。

㊷ 北九州市史編さん委員会編『北九州市史 近代・現代（教育・文化）』北九州市、一九八六年：三八－四〇頁。

㊸ 福岡県立小倉高等学校創立百周年記念実行委員会編『創立百年史』福岡県立小倉高等学校、二〇〇八年：二八頁。

㊹ 福岡県立豊津高等学校七十年史編集委員会編『福岡県立豊津高等学校七十年史』福岡県立豊津高等学校、一九五八年：五三－六四頁。

㊺ 福岡県小倉市役所『小倉市誌補遺』一九五五年：一九二－一九三頁。

㊻ 北九州市立中央図書館編『北九州市立図書館誌』北九州市立中央図書館、一九八六年：七－八頁。

㊼ 前掲46：九頁。